芸術（音楽）領域における
知的障がい者の職業リハビリテーションに関する実践報告

○佐々木 浩則（株式会社ヤマハアイワークス　専任ジョブコーチ）

１　はじめに

本報告は、知的障がいのある個人（以下「本人」という。）の音楽活動が、いかにして天職へと育まれたか、その具体的プロセスを振り返るものである。本人の主体性と父親の伴走支援が相乗効果を生み共働・共生へと昇華した結果、ピアノ即興演奏は本人にとって「生きることそのもの」となり、「自分のピアノカフェを持つ」夢を実現した。この実践を通じて、音楽活動における職業リハビリテーションの意義と可能性の一端を明らかにしたい。

※本報告は、本人の同意を得て公表するものである。

２　音楽を通じた初期発達と自己肯定感の醸成

⑴　ピアノの手ほどき（小学１年生～）

教師との連弾形式の教材を用いることで、本人は簡単な音を弾くだけで豊かな音楽体験を享受できた。このポジティブな学習体験は、音楽と協働作業への興味・関心・意欲を高め、達成感、自己効力感、継続的な学習意欲、他者への信頼感や感受性を育む基盤となった。

⑵　即興演奏遊び（小学２年生～）

即興演奏は、本人と父親による「音と言葉のキャッチボール」として始まった。本人が自由に音を鳴らし、父親がその音から浮かんだイメージを言葉で伝えることで、イメージの言語化を苦手とする本人と父親の間に豊かな音楽世界が創造されていった。本人は今もなお、ただ無心に演奏し、聴く人が心に様々なイメージを浮かべる。その共同作業を大切にしている。

この活動は、練習や指導のない「安心できる本番」の連続であり、常に自己表現が受容される環境を提供した。その結果、本人は緊張することなく集中して伸び伸びと演奏し交流する姿勢を身につけた。この姿勢は音楽活動に留まらず日常生活にも影響を与え、非認知能力が内発的な動機付けと自己表現の喜びを通じて育まれた。これらが将来的な演奏活動の基盤となり、天職（特に生きがいと自己実現の側面）へと繋がった。

⑶　鑑賞活動を通じた自己選択能力の育成（小学３年生～）

音楽CDを一緒に聴き、多様なコンサートに親子で参加する中で、音楽をどのように表現し、共有し、心を動かすかを無意識に体験する機会が増えた。徐々に本人が単独でコンサートに参加するようになり、また音楽関連の映画やDVD鑑賞を通じて「人と音楽の関わり」への理解を深めた。最終的には鑑賞する音楽や映像を本人が自ら選択するようになり、多様な興味・関心、社会性、適応能力、そして自己選択・自己決定能力が育まれた。

３　社会的交流と専門性向上のための活動

⑴　セッション参加と演奏交流（中学２年生～）

様々な音楽ジャンルのセッションに参加してアンサンブルの楽しさを経験した。その中で簡単なコードでの演奏方法を習得し、先輩の演奏を模倣することで表現の幅を広げた。美術・演劇などとのジャンルを越えたコラボレーションや地域を越えた活動は、ニュージーランドにおけるワーキングホリデー中のストリート演奏や現地イベント出演にまで広がった。オリジナリティ溢れるピアノ即興演奏は、見知らぬ土地での長期滞在交流の大きな支えとなった。

⑵　全人的アプローチによる人間力の醸成（小学５年生～）

剣道やフットサルは、体力や集中力だけでなくチームワークやレジリエンスを育み、これらが音楽のダイナミズム、他者との協調、困難な状況でのパフォーマンス維持に繋がった。

旅や社会交流活動を含めて父親は多くの場に一緒に参加して体験を共有し伴走支援した。これらが音楽活動の質を高め、また多様な場で役割を担うことで、演奏活動は天職として社会とつながる手段となった。以上の「全人的アプローチ」による「総合的職業準備」により、共働力や人間力といった音楽活動全体の土台となる能力が培われた。

⑶専門的な音楽学習（小学６年生～）

専門的な初歩指導を受け、音楽専門学校高校科への進学後も多様なジャンルの音楽を積極的に学んだ。進学以前の活動により興味・関心・意欲・態度が育っていたため、高校進学後の厳しいレッスンにも意欲的に取り組み、高い学習意欲、困難への適応力、多様な学習方法への対応力、協調性が育まれた。以上により、これまでの活動で培われた基礎能力が、より専門的かつ実用的なスキルへと発展し天職の基盤となった。

４　職業的アイデンティティの確立とキャリア形成

⑴　父子共演を通じた実践的職業能力向上（中学３年生～）

父子共演を、被災地を含む様々な場で行った。その中でも特に「葉っぱのフレディ（朗読とピアノ）」を生涯にわたる活動演目と位置づけた。朗読とピアノを重ねず交互に演じることでピアノの自由度を確保し、後に本人が朗読と演奏の両方を担当することも可能にした。この物語から

「父が亡くなっても独りではない。いのちは永遠につながっている」と本人が実感することを願っている。これらの活動は、これまでの個別の成長を集大成し、共働・共生の実践的な職業能力と職業人生観、社会貢献意識を育む機会となった。

⑵ プロフェッショナル基盤の構築（高校２年生～）

多様な演奏を様々な場で楽しむ経験を経て、リサイタルを定期的に開催するようになった。初回は即興ソロ演奏とバンド演奏の二部構成であったが、回を重ねるごとに本人が選曲やMCも担当し、ソロリサイタルもできるようになった。多様な形式（ソロ／コラボ、オンサイト／オンライン、有料／無料など）で継続している。以上により、これまでの音楽活動で培われた能力を総合的に活用し、プロフェッショナルとしての基盤を築いた。

⑶ 作品制作を通じた自己再構築と職業的アイデンティティの確立（23歳～）

知的障がい診断を受容できずパニックになり入退院を繰り返した経験から、父親は「このままでは息子の人生が終わってしまう。始めないと始まらない」とレコーディング／CD制作を決意した。精神的な危機の中で、心に嵐が吹き荒れるワンパターンな即興演奏では作品にならないためジャズを中心とした選曲を行い、内向的なエネルギーに満ち研ぎ澄まされた演奏が生まれた。またレコーディング前日にリサイタルを行うことで演奏の完成度を高めた。その後は即興演奏を中心に、回復過程の生き様を記録するオリジナルなアルバム制作を続けている。

即興演奏は本人の主体的世界であり他者からの指導やアドバイスを必要としない。この活動は、精神的な危機からの回復を目指す自己再構築の過程で、創造性、プロフェッショナル意識、目標達成能力、そして自己の生き様を表現する職業的アイデンティティを確立するために重要な役割を果たした。回復してからではなく「回復途上にあっても、音楽と心は深まる」ことを実感して支援を続けている。

⑷ ピアノカフェとインターネット配信による持続可能なキャリア形成（28歳～）

パニック症により外出が不自由な状況で本人自身が考えた「自分のピアノカフェを持ちたい」という夢をきっかけに、既存のカフェを引き継ぐことになった。但しこれは、本人の夢を深掘りし、健康状態と生活状況を考慮した結果、一般的なカフェ営業ではなく、プライベートスタジオとして友人との交流や演奏を行う場となった。

父親の「自由にピアノカフェを続けるためにも、今こそ働こう」という言葉が本人の就職を後押しし、パニックでバスに乗れない本人は「自動車が運転できれば安心して通勤でき働ける」と意欲を高めて免許を取得し就職した。現在では定職を持ちながらカフェからピアノ演奏をネット配信し、グローバルな交流を目指している。この活動は、これまでの経験を統合し、自身の夢を起点に現実的な状況と摺り合わせながら就労を実現し、さらにデジタル技術を活用して自己表現と社会参加の場をグローバルに拡大していく、持続可能なキャリア形成の新たな形を創出している。

５　結び

本報告で示したプロセスは「生きづらさを抱えるわが子を、音楽の力で幸せにしたい。一緒に幸せになりたい」という父親の強い思いが、都度の選択と積み重ねを生み出したものである。その中で、本人のピアノ即興表現が聴く人の心に「働きかけ」、その価値が明らかになるにつれて活動が広がり、対価や報酬が発生した。

「仕事の価値は相手が決めるもの、報酬は金銭に限らない」という考えのもと、無料から有料までご縁に応じて活動を続けている。より高次の普遍的な目標である「幸せにしたい、一緒に幸せになりたい」という共働・共生・ウェルビーイングの追求が、多様で継続的な活動を生み出した結果として、音楽が本人の天職となった。

この実践は、個人の「幸せ」と「生きがい」を追求するプロセスにおいて、芸術活動がその強力なツールとなり得ることを示している。そして、共働・共生・ウェルビーイングを目指すことが、知的障がいのある人の持続可能なキャリア形成と豊かな社会参加を実現するための鍵となることを実証した。

以上の成長の大半は、本人も周囲も知的障がいを認知・意識しないリスキーかつインクルーシブな環境で実現した。その後17歳で受けた障がい診断を受容できず２次障がいとしてパニック症を発症した。「息子と同じ世界で生きたい」とジョブコーチになった父親をはじめとする医療・福祉・雇用の専門支援チームをもってしても回復の道は成長と比べて遥かに険しい。自尊心と社会への信頼を回復し、ピアノカフェを、地域に根差すと同時にグローバルな活動・発信拠点として安心して暮らすためにも、共生社会の実現を目指したいと考えている。

【連絡先】
e-mail: hironori.sasaki@music.yamaha.com

【演奏映像】
http://www.youtube.com/@yupa2025